

## 楽しい沖縄料理 (2) ルーゾーミン



沖縄では冷たい「素麺(そうめん)」を食べることはあまりありません。たいがいは「ソーメンチャンプルー」にしてアツアツで食べます。正しい名前は「ソーミンタシヤー」(素麺炒め)といいますが、素麺をゆでてから油で炒めるのです。具はニラかネギがあればけっこう。でも、伝統的な素麺料理もあります。それが「ルーゾーミン」です。

漢字で書くと「如意素麺」。「如意」は「にょい」と読み、「思うがままになる」という意味です。そういえば『西遊記』の主人公・お猿さんの孫悟空の持っている棒は、長さが自由に換えられる如意棒でした。小さくすれば耳の穴に隠せるし、体より大きく伸ばせば巨大な敵をも倒す武器になります。

また、中国には「万事如意」という言葉がありますが、これは「すべてが希望通りになりますように」という意味で、お正月などのおめでたい席で言う祝福の言葉だそうです。素麺は形状が長いので長寿につながる縁起ものとされますが、さらに如意がつくのですから、ルーゾーミンは「上等おめでたもの」といえます。正月料理のお汁として並ぶのも納得です。しかし、上等なだけに作り方に格式があります。

素麺は1束の半分ずつを、片端だけ糸でくり結んでからゆでます。それをきれいに折りたたんで、上に具をきちんと並べます。具は色とりどりにしましょう。その上に熱い汁をかけていただくのが正式ですが、冷たい汁でもかまいません。



## 編集後記

震災があつてすぐに、神奈川県逗子にお住まいの小橋さんが、仙台の会員と関東の会員が集まれるように場をつくらうと提案して下さいました。当初は動ける気がしなかったのですが、夏休みが近づくと連れ、仙台の清水千佳さんご家族に一息ついていただきたく場所を探していたところ、小橋さんが清水さん一家を受け入れて下さることになりました。豆ランチパーティーの後、13日には、清水家とうちの家族と一緒に箱根の金時山に登りました。清水家三兄弟は朗らかでとても楽しい一時でした。その翌日、わたしは仙台に行き、千佳さんにホスピスに連れて行ってもらう、加藤哲夫さんを見舞いました。そして会員の木田さ

## にんじん食堂うずまさ 料理人・じつかた ふじお

## 【材料】(4人分)

素麺(1人分・2束ほど)、かけ汁(昆布・かつおぶし・醤油・塩・みりん)、具(好みで何でも・・・写真の場合、左から赤ピーマン・油揚げ・ゴーヤー・にんじん・緑ピーマン・干しいたけ・カステラかまぼこ・絹さや・・・ほかに、鶏むね肉・ハム・とうがらし・なす・きゅうりなど)

## 【作り方】

- 1) 干しいたけは、水かぬるま湯でもどしておきます。
- 2) 昆布とかつおぶしで出汁をとり、の干しいたけのもどし汁も加えます。カステラかまぼこ(卵入りの沖縄の揚げ蒲鉾)を、この出汁でゆでると、さらに旨味が深まります。醤油・塩・みりんを足して少し熱して好みのかけ汁を作ります。
- 3) 素麺は25グラムずつ片方の端を糸で結びます。1束は普通50グラムなので、正確に計らないで半分にするだけでOK。糸で結ぶのも面倒ですから、輪ゴムで巻きます。簡単でしょ。
- 4) 具として乗せるものは、みんな5センチ長さ×7ミリ幅×3ミリ厚さぐらいに切ります。この寸法も適当・たいがい(沖縄ではテーゲーといいますが)でけっこう。ゴーヤーは生のまま半分の厚さに切って、緑色の皮の側を使います。白い方はまずいので捨てます。お湯を少量だけ沸かし、緑と赤のピーマン、絹さやをサッとゆで、にんじんをよくゆでます。油揚げとしいたけは甘辛く煮るといいでしょう。カステラかまぼこは手に入らないので、入れなくてもいいですが、白かまぼこ・ちくわなどで代用できます。
- 5) 素麺をたっぷりの熱湯でゆでます。結んだところを持って、お湯にそうめんを浸けて、振動させて広げさせ、湯に入れた後も、麺と麺がくっつかないようにハシでゆらしながらやや硬めにゆでます。
- 6) の素麺を水でよく洗い、水に浸けておきます。
- 7) にお湯をかけて温め、井か大きめのお椀に折りたたんで盛り入れて、結んであるためにゆだっていない部分を切り落とします。
- 8) 素麺の上に具をきちんと並べて、熱々のかけ汁をかけてできあがり。

で残った素麺は輪ゴムをはずして、ゆで直して使います。素麺を結ばずにバラバラにしてゆでてもいいですが、盛り入れるときにきれいに並べましょう。

にんじん食堂太秦 HP <http://www11.ocn.ne.jp/~ninjin-s/>

んが千佳さんの紹介でボランティアをしていた青根温泉に行き、2次避難をしている石巻の方のお話を聞かせていただきました。翌日、東京の川内たみさんのところによってから京都に帰り、しばらくあって加藤さんの訃報を聞きました。再度、仙台へ。その際、以前からやりとりしていた福島県伊達市の本田さんに、福島を案内してもらい、また、仙台ではパレスチナオリーブの皆川さんから、宮城県の状態を聞かせていただきました。その二日間のことはいまだに消化できません。9月23日には、伊達市の本田さんに京都に来てもらって、福島のことを話してもらいます。被災地の人たちと連帯していきたいです。(千晶)



## らくてん通信

No 54 2011/09/20 発行 楽天堂  
季刊 編集長・高島千晶

〒602-8354 京都市上京区下立売通七本松西入西東町364-14 TEL:(075)811-4890 FAX:020-4665-6740  
exchange@rakutendo.com ツイッター <http://twitter.com/chiakitakashima>

営業日時: 月・土曜(日曜&祝日休業) 午後1-7時

## 豆ランチパーティー報告・夏

## マネ?ランチパーティー@宇陀(7/3)

## ウダウダの会・天根 静也(あまね しずや)

簡単に自己紹介させていただきますと、私は現在は、奈良県宇陀市の大宇陀というところにある報恩寺というお寺の住職をしています。3年前までは、京都市内に住んでいたのですが、長女の小学校への進学を機に、大宇陀に定住することにしました。京都にいる時はWEBの制作会社の経営とママネという美容室をやっていたのですが、それは規模を縮小して現在も運営を行っています。

この「マネ?ランチパーティー」は、私達が主催している「ウダウダの会」の第2回目のイベントでした。第1回は、5月の29日に宇陀市議の勝井さんを招いた東日本大震災の報告会でした。勝井さんとは、Twitterで知り合い、Twitter上で被災地に行くことを知り、「帰ってきたら報告会をしますか?」とTwitterでお尋ねしたら、「開きますよ」ということなので、「宇陀」と「うだうだする」を掛け合わせた「ウダウダの会」というのを立ち上げることにしました。

1回目の時から相談をしていた楽天堂の高島千晶さんに2回目にゲストとしてお招きし、開催されたのがこの2回目の「マネ?ランチパーティー」です。これも、楽天堂さんの「豆ランチパーティー」を出来るだけ参考にさせていただいて今後私達も取り入れていこうという気持ちを含めて、「マネ?ランチパーティー」という名称にしました。

今回は、1回目に参加されていた方と、楽天堂さんが連れてこられた方、豆料理クラブの会員の方と私達の友人合わせて20名の参加でした(プラス子どもが10名おりました)。

最初に千晶さんが震災後の話題として、4つのことを取り上げられました。1つは会員さんの安否と受入先の話について、1つは被災地方面の買い支えなどの支援について、1つは、Twitterについて、そして最後に、ご自身の学校のプールの放射線量測定の話と騒動について、どれもこれも、私達が多かれ少なかれ関わり直面する話題ばかりで興味深く聞かせていただきました。

そのあとは、一人一人の自己紹介になりました。ウダウダの会はなぜ夫婦での参加が多く、今回も、7組の夫婦が参加しておりました。独身の人口が少ないせいもあるかもしれませんが、私的には夫婦での参加が多いことはとてもうれしく思っています。それと、私は40歳なのですが、ちょっと若いまだ子どものいない30代の夫婦の参加者がいるのも頼もしい気がしています。そして、元々この地にすんでいる人ではなく、移住者がほとんどであるのもこの会の特長です。

自己紹介の中で印象に残ったのは、助産師をされている方の話でした。一番母子に近いところにいるのに、放射性物質の危険性を話そうとしたら上からおとがめを受けたり、取り合

てもらえなかったりということなどで物凄く葛藤されていることを涙ながらに話されていました。旦那さんも奥さんの葛藤がこんなに大きかったのかということをお席で驚かれたようで、後でお礼のメールをいただきました。自然とそういう自分の心の中を吐露出来る場になっていたのは最初の千晶さんの話のおかげではないかと思いました。

個人的にはもう一つ、ムーさんの自己紹介が色々意外な話が多くて面白かったです。真面目な部分では、原発は人が踏み込んで行けない領域なのにそこを危険とを感じる身体感覚が欠如してしまっているという話なるほどなあと思いました。

ある程度メンバーが固定化しそうなので、自己紹介は何回もする人も出てくると思うのですが、これは自己PRの練習の場だと思っ手を抜かずに続けていきたいと思っています。

各自の長~い(笑)自己紹介が終わってようやくランチタイムです(でも一人一人の話はもっと聞きたいようなそれぞれ密度の濃い話でした。)

今回の食卓は非常にバラエティーあふれる食卓になりました。こちらをご覧ください。 [http://uda2.net/?page\\_id=47](http://uda2.net/?page_id=47)

この近辺は外食を楽しむような環境ではないので、みな自然と料理作りに趣向を凝らすことが好きなかもしれませんね。豆料理クラブ会員で神奈川から移住地探しの旅行の合間に立ち寄られた方が、「こういう集まりをしようとしても今はその食材が用意できない」と話されておりました。

あっという間に沢山あった料理がみんなの胃袋に消えてなくなってしまいました。

そして、そのあと原発ではないですがエンジニアの仕事をしている方がいらっしや、その方に今回の原発の事故について思うところを話してもらいました。そうこうしていると、前回のゲストの勝井さんが途中参加。勝井さんが割って入った話をきっかけに、ムーさんも含め男性陣があーだーこーだと言いだす状況になってしまったのですが、「そろそろ休憩しましょうか」という千晶さんの絶妙なタイミングで場は収拾し、デザートを食べながら塩コンブの作り方のレシピを聞くことになりました。

最後にもう一度1人1人の感想を言って会は終わりました。感想で印象に残ったのは、1人は瓦職人をしているママネのスタッフの旦那さんの話。建築資材不足で仕事が減り、福島の方へ出稼ぎに行こうか迷ったことや手仕事の話・瓦を通じて屋根が呼吸しているという話。まだ若いのにみんなの前で堂々と自分



の考えを話すのは頼もしいなあと思いました。それと鍼灸の先生。自分ができることをするという話。さすがは長老という感じで説得力のあるお話でした。

こうして皆がゲストでもいいような個性的なウダウダの会第2回は、お陰様で無事終わりました。

なのですが、後片付けをして楽天堂チームが帰った後、2次会(といってもウダウダ残っていただけですが)が始まりました。

こちらで農業をしている若者が、友人が東北地方にいてそういう縁もあって、夏休みに子どもたちを短期間でも受け入れられないかなあと言う話が会の中でもあったのですが、具体的にどんなことが出来そうなのかという話を市議の勝井さんにもアドバイスしてもらいながら話をしていました。

それで、もっと何をしたいか何が出来るのかということをもた別の機会に話しようということになり、それはウダウダの会ではないですが、こちらのお寺をミーティングの場としてお貸しすることになりました。今回のイベントの影響を受けてかしれませんが、夕ご飯1品持ち寄りで行うことになりました。

そうやってこの会をきっかけに別の集まりが出来ていくのはとてもこのようなスタイルでやって良かったと思いました。

元々お寺という場所は法事や葬式で食事をふるまったりすることもあり、キッチンや食器などこういう1品持ち寄りの会にはうってつけの会場なのだなあということにあらためて気付かされました。

これをお読みの皆さんの地元のお寺がそういうことに場所を貸してくれるかどうかということまでは、私にはよく分かりません。でも、自分としては、自分の家族のつながり、同窓生の繋がり、地域のつながり、仕事の繋がり、檀信徒という繋がり。これらは皆社会的な関係をベースにした繋がりだと思うのですね。ではなくて、興味や関心で繋がるゆるーいつながりがこれからは大事になってくるのではないかと考えています。社会的なつながりにはどうしても上下関係ができてしまいます。ツイッターでフォローしたりされたり程度の関係のリアル版。そういう繋がりを提供することは大切ではないかと思うのですね。

色々なニュースを見るにつけ、もうトップダウンでは物事が進まない。ボトムアップでないといけない時代に入ろうとしていると思います。

もともとがIT系なので、ウダウダの会もユーストリームで配信してなんてことを一瞬思ったりもしたのですが、そういうことではないと思います。共有も大事ですが、一期一会という「その時その場で会う人」との関係を大切にしていくことも大切だと思います。逆に出会ったのなら何か事を起こさないと出会えなかった人に失礼と思うぐらいの意気込みで共通のルールを引いてみてほしいのではと思っています。数を多く集めることが目的でもなく、集まった者が息吹を吹き込まれるような場をこれからも作っていききたいです。

ウダウダの会HP <http://uda2.net/>

## お知らせ

**10/7(金) 豆ランチパーティー 制約とアイデアが仕事を形づくる** 午後5時～ 会場：トリベル 会費：豆料理クラブ会員2000円 一般2500円 定員12名 前々日までに楽天堂へ要予約 パンとスープを用意しますので、一品ずつお持ち寄り下さい。高島千晶が「自分の身の丈にあった小さな自営業の仕方」について、しょぼく、ささやかで、地味な実験例をお話します。

## 3・11後の仙台 & 東京 わたしたちは何を感じてきたか 豆ランチパーティー@逗子(8/11)

ゲスト：清水千佳さん(宮城県仙台市在住)

高田 晶子(たかた あきこ)

当日お会いできた皆様、同じ時間を過ごさせて頂きありがとうございました。そして、楽天堂の高島様ご夫妻、会場を提供していただいた小橋様、ゲストの清水千佳様に、心から感謝申し上げます。すぐにもMLに感想など書けばよかったのですが・・・あの場で聞いたこと・感じたことを言葉に起こすのがなかなか難しく、ここまで来てしまいました。千晶さんのメールに促されてやっと出てくるようでは、いけないなあと反省です。千佳さんが地震に遭ったのは、ピーアイ(ハート&アート空間 Be1 <http://www12.ocn.ne.jp/bei/index.html>)で絵画教室をしていたときでした。家族のことが気になったけれど、預かっている子どもたちを避難させたり親にお返ししたりしなければならぬので、勿論すぐには帰れませんでした。帰宅すると、お子さんたちが、水その他必要なものを一つの部屋に集めてくれました。地震の後は、年上のお子さんが下のお子さんを迎えに行ったとのこと。そして、真ん中のお子さんは、当日以降何があったかを、ノートに記録していました。

豆ランチパーティのとき、現物を見せて頂きました。皆さん同じように思われると思いますが、兄弟同士で安全確保を自主的にした・お子さんたちだけで物資をきちんと集めた・記録に残すべき状況だと判断し実行した、というところ、本当にしっかりした素晴らしいお子さんたちだと感じました。

電気は比較的是やく復旧したけれど、水とガスは時間がかかりました。お子さんのノートを読んで頂きましたが、あの寒い季節の中、給水車が来たことを知ればペットボトルなどを持って水をもらいにいき、食料や物資も日々苦労しながら、協力して手に入れていたことがよく分かりました。千佳さんのお宅は2階の壁が落ちてしまって今でも使えない状態。一時は、そのお宅に10人で暮らしていらっしゃいました(千佳さんの従姉妹と、90歳のおじい様を含むそのご家族は、その後千佳さんのお宅の近所に転居先を確保されました)

ピーアイでは絵画展を行う予定でしたが、初日がこの震災の日でした。絵画展を予定通り行うことは出来ませんでした。もともと絵画展のために子どもたちの絵を展示してくれることになっていたお店等の方たちは、絵画展の期間が過ぎても、絵をきちんと飾ってくれたそうです。

今、千佳さんは「こどもとあゆむネットワーク」(<http://www.ayumunet.jp/>)で、これまでに集めた子供たちのための絵本を入れる本棚を被災地に送る、というプロジェクトに関わっていらっしゃいます。

そのほか、印象に残っている、千佳さんのお話・・・「東北は、農業・漁業が中心産業で、「畑ができれば何とかなる」「海に出られるようになれば大丈夫」と思っている人が多い。そんな人たちに、放射能の話はとてもできない。被災地が広すぎて、全部をサポートしようというのは無理。息の長い支援をお願いしたい(私の主人の、「避難生活では排泄物の処理

## 山口からの便り その二

### 上関原子力発電所計画のその後の動き

東日本大震災から2ヶ月が経った5月27日。

山口県上関町への中国電力の原子力発電所建設計画をめぐる、周南市議会は「現状では安全性の確保が困難」として中国電力に中止を申し入れるよう二井関成知事に求める方針を全会一致で決めました。

県や市議会事務局によると、上関原発計画の中止を求める意見書は、県と県内19市町の議会で初となる。その後、山口県内では、周防大島町・宇部市・光市・柳井市などが、原発交付金が財源になっているのに関わらず、次々と議会が知事へ上関原発中止を求めて意見書を提出しました。

6月27日 二井知事は、県議会本会議で、予定地の公有水面の埋め立て免許の延長を現状では、認めない考えを示した。原発の新増設を含むエネルギー政策を白紙から見直す国の方針を受け、上関の計画の先行きが不透明になったと判断。来年10月で期限が切れる免許について「新たな手続きに入ることはできない」と述べた。(一部新聞記事より)

原発の事故後、国や県・市町村のリーダーも色々大変な決断を迫られていました。これからは、もっともっと市民の私たちがこれらのことを他人事とせず、自分のこととして、選択し、意見を言い、一緒に未来を作っていかなきゃいけない！そう思いました。

今は、予定地周辺も静かな時間が流れています。しかし、工事は、中断していますが、「白紙撤回」では、ありません。今後もみなさんと一緒に国や県、中国電力の動向をしっかりと見続けていきたいと思えます。

### 8月6日 広島原爆の日

「8.6ヒロシマ NO MOREヒバクシャ みんなでウォーク～原発も核兵器もない世界へ～」広島原爆ドーム前 中国電力本社前(座り込み申入れ激励) 平和公園噴水前(NO MOREヒバクシャのつどい)と約2キロを1500人で、歩きました。私たち家族も参加しました。暑い一日でしたが同じ思いの方とのウォークは、みなさんの思いを直接感じられ、「ありがとうございます」と感謝の一日でした。

### 8月9日 長崎原爆の日

「世界の原発おつかれさま会」が集めた署名をこの日日本全国ほぼ同時にそれぞれが住む地域の経済産業省へ申入れと署名提出をしに行こう！と神奈川県の一のお母さんからの提案で行われ、私も山口県で集まった署名を持って、広島・岡山の代表の方と3157筆(電子署名含まず)を添えて申入れました。全国にある原発を順次停止し、今後における新規増設、更新計画等を撤回すること。未来の子どもたちに(使用済み核燃料を含む)安全な環境を提供するため、全原子力を廃炉すること。他4項目。

### シーカヤックで海と遊ぼう！

この夏は、息子と一緒に主人のシーカヤックツアーの手伝いも兼ねて、かなりの頻度で海に出かけました。暑い夏ですが、シーカヤックに乗って、海の風や波の音を感じ、シーカヤックでしか行けない浜を見つけては、上陸し魚と一緒に泳ぎました。ご案内させていただいたお客様からも「こんなにきれいな

原 真紀 (はら まき)

海は、大切にしないとね！」シーカヤックに乗ってのツーリングは気持ちいい！」との声をいただきました。海は、全てをつなぐ道。シーカヤックに乗るとそう感じるようになりました。息子も昨年に比べて、だいぶ海と友達になれました。

漂着ゴミは、後を絶ちません。でも、まだまだきれい。魚も生き物もたくさん！少しでも多くの方にこの海を感じてもらいたいです。もちろん、子ども達にも。



### レインボー大作戦8月28日開催

山口県内10か所で、女性中心に食・育児・生活・衣服・エネルギーについて、みんなで感じよう、考えようというイベントをしました。多くの方とのつながりが、これからの不安を少しでも軽く、未来に希望の持てる仲間に出会うことができました。楽しかった～！ (2011/8/29文・写真 原 真紀)

・・・10Pから続く

おっぱいが終わっても熱が出ては保育園に呼ばれる日が何日もありましたが、誰一人また～なんて顔はせず、「こればかりはしょうがないよね、お大事に」と声を掛けてくれ、スタッフの理解や思いやりにありがたいの一言です。

仕事のやり方も出産前と同じでは他スタッフに迷惑がかかると思いい、私が急に不在になっても今日やらなければいけないことが誰にでも分かる予定表のようなものを一月分作り壁に貼るといった工夫をしています。おかげで段取りも以前より無駄なく組み、「これやるの忘れてた～」という失敗が減ったような気がします。

フェアトレードショップをやっている以上、売る側の私たちの暮らしも安心できるものでなければいけない。縁があり共に働いているスタッフは家族と同じ。嬉しいことは一緒に喜び、苦しいことは分かち合う(夫婦の誓いみたい・・・) 誰かが困っていれば、やれる人がやれる範囲のサポートをする。こんな当り前のことをやれる企業が少ないのは、今の日本の経済システムはやっぱり異常なんだと思います。

「このバイトさんはこの日の行事でお休みだから、この人に入ってもらって～」とパズルのような勤務表作りに、毎月脳みそを鍛えてもらっている日本一幸せな店長です。

コミュニティ・トレードalでは楽天堂の豆料理キットを扱っていただいています。 <http://www.h4.dion.ne.jp/ftc/index.html>

## 連載 共同で店をもつ (2)



## 平等であることと持続すること

岡 聡一 (おか そういち)

を毎週木曜日だけ借りてバー営業をしております (営業時間午後8 - 12時)。OKABARは2人でやっていますが、わたし自身感じていることとして、客観的に見てももうひとりの店員はあまり働かない。よくお客さんとカウンターにすわって喋っている。しかしながら、わたしはそれはよしとしているようです。ストレスもあまりたまらない。なぜなんだと考えても、「そういう関係でうまくいっている。」というしかないのです。

「日頃のつき合いというのは釣り合っていない方がきつといいのだと思う。何故かなんて筋のとあった説明はないが、たとえば親子の関係や人間とペットの関係のように、長くつづつき合いというのは対等ではないもので、寄りかかっていた方がだんだん対等に近づいていくときはむしろ関係が離れていくときなんじゃないかと思う。」(保坂和志「季節の記憶」より)

共同経営の店において、「平等である」ということを先に決めてしまうと感じる違和感によって、そもそも「平等である」こと自体が続けることに対する障壁なのではないかと思ひ始めました。「続けること」を目指すならば、「平等である」ことは考えないほうがいいのかもかもしれません。近ごろ「続けること」に興味が出てきています。店の経営、仕事、家族関係、シェアハウス...、持続するために必要でおそらく現実的な「お金」。しかし、お金の平等のことを考えると大切な何か忘れられてしまう気がするのです。続けることがよいことだと信じるのならば、共同経営はいろいろな部分が不公平であることがむしろ続けられる条件じゃないでしょうか。むしろ、不平等でも、それを受け入れられる関係を築けるようでないと長くは続けられないような気がします。

筆者ブログ おかばあのぶろぐ <http://okabar.exblog.jp/>

共同経営という形態は、共同であるからその、さまざまな問題を含んでいます。そのひとつが、「対等な関係」です。トリベルは3人の共同経営ですが、それぞれがやりたいことを持っており、もちろんそれぞれの能力も違います。たとえば料理の技術、掃除のこだわる部分、店のレイアウトのセンス、など。日々の営業のあらゆる場面で、3人それぞれが違うということを、ふと感じています。違いを肯定的に「自分がもっていないものを持っている」と考えられるか、それとも否定的に「自分ができることができない」と考えるかで、大きく違ってきます。

さて、トリベルのような誰が雇い主でも労働者でもない関係は、それぞれのやりたいことが違う場合、話し合いをもって、決定していきます。雇用被雇用の関係と違って、それぞれ対等の立場ですから、(少なくとも建前上は)みなで決定する権利を持っています。といっても人間の関係ですから、理屈以外の部分での力関係のバランスはあるわけで、最低限の基準として「お金のこと」は平等にしよう決めました。しかしどこかで違和感がある。自分の労働の対価が「お金」であると考えれば、その労働にそもそもバラツキがあるとすると、平等にした「お金」もバラツキがあるはずなのに、平等にしてしまっている。無論もっとも「お金」は現実的なものさしでのひとつあるのですが、この違和感はどこから来るのでしょうか。

わたしが運営しているもうひとつのスペースにOKABARがあります。京都御所近くのザ・パレスサイドホテル2階の共同キッチン

## 母ちゃんバンザイ！赤ちゃんもバンザイ！！アルの産休記

高柳 知香子 (たかやなぎ ちかこ)



ベビーが7ヶ月の時に保育園に預けフルタイムで働き始めることにしました。その時もまたボスが「ベビーには、ミルクよりもおっぱいが一番いい。保育園に聞いてOKならおっぱいをあげに行かんか」と言ってくれました。保育園は意外にもあっさりOK。1日2回自転車をこいでわが子へおっぱいを運び続けました。

保育園に預ける＝おっぱいで育てることをあきらめる、と腹をくっていたのでこの時は本当にボス、スタッフ、保育園に感謝でした。

この時期は、毎日風のようにビューーッと走り抜ける姿をいろんな方に目撃され、「どこ行ってたの?」「何をそんなに急いでいたの?」とフシギ顔で聞かれたものです。その度に、「えーっと・・・おっぱいを・・・少々・・・」と答え、驚かれました。

11P右へ続く

私は石川県野々市町のコミュニティ・トレードal(アル)というフェアトレードショップの店長です。フェアトレード品の販売と、オーガニック食材を使ったデリカフェを提供しています。

当店のスタッフ、アルバイトは計8人。全員女性。その内の半分、4人が小学生より下の子どもを持つママさんです(ちなみに、ボス(代表)は4人の母です)。学校行事や熱が出た！などの幼い子特有のピンチも、全員でサポートしあい店を切り盛りしています。それが実現できているのも、ボスが「大切にしていること」の順位が効率資本主義ではない所が大きいと思います。

私は3年前に結婚しました。するとボスは、「子を産むなら1秒でも早い方がいい。(年齢を察してくれたのもあると思いますが・・・)と母へのレッドカーペットを敷いてくれました。おかげで心おきなくすぐに妊婦になり無事に出産しました。

産休を過ごしていると、「いつまでベビーと一緒にいたい?」と相談してくれ、完全復帰までの間はベビーが昼寝をしている数時間ボスが子守をしてくれ、私は店に立ったりデスクワークをしたりしました。

が大きな問題になるが、実際どうでしたか」という問いに)農地が多いので、農業に携わる人たちは、畑に埋めるという手段を取ることが出来ました。

千佳さんのお話を伺った後、参加者一人一人が話をする時間を2回持ちました。そのとき印象に残ったお話・・・

ハミルトン純子さんの「被災したとき一番必要なのは、とにかく現金。集めるために、アイルランドでチャリティーディナー会を行った。会費を現地の人に相談したら、日本円で1万円位の金額を全員が勤めた。それは、もともと寄付文化が定着していることもあり、チャリティーなのだからきちんとお金が残るようにやりなさい」というアドバイス。

高島無々々さんの「復興＝元の生活ではない。今が、近現代と違う世界をつくるときであり、そのためには身体感覚に立ち返ることが必要ではないか」。

高島千晶さんの「自分の仕事を全うすることがとても大事。自分の商売をするということは、自分の思いを表現できるということ」。

この時間のなかで一番感じたことは、地震・津波・原発事故の影響を直接受けた方達とは質もレベルも違うのですが、関東の人たちもまた、今回の震災で深く動揺し、傷ついたのでということでした。しかし、東北の被害が余りに甚大で、普段堂々と、その衝撃や傷について言葉にすることがはばかれる空気があったからでしょうか、関東にいる私たちは、そういった自分たちが受けた衝撃を、まず自分自身が受け止める、という大切なプロセスをまだ行っていないのではないかと感じました。

被災地支援はとても大切で絶対必要なこと。それに加えて、被災地以外の地域にいる(支援する側の)人も、震災が心にと与えた傷をなにもにしたり、もってはいけなものと感じたりするのではなく、そこにあるものとしてお互いにその思いを聞きあい、正面から見つめる機会を持つことが、被災地の方たちと共にこの先を歩むためにも、必要なのではないかと感じました。

私は、川内たみさんや他の方がおっしゃった「絶望」という言葉にあのとき反応したけれど、「絶望」という言葉の意味をきちんと受け止められていないのかもしれないかも。

豆ランチパーティのとき、私は、「乳がんを経験して余命の見込を言われたが、それで絶望したままでは毎日生きていけない。明日死ぬとしても、今日、今、生きている、その事実を、絶望でも希望でもなく、素朴に大切にしたい」というような言い方をしました。

私の場合は「1年以内に再発したら2年の命」と言われたのですが、それを過ぎるまで、日々、再発が来るか来ないかびくびくする気持ちがありました。無事?その期間を過ぎましたが、その時気付いたことは、余命の見込みがどうあれ、生きている限り再発するかもしれないし、しないかもしれないという状況は変わらないということでした。であれば、再発するかもしれないと思って生きるより、今生きていることの方が大切だ、と思ったし、そうでないと生きられていることを活かせないと思いました。

原発事故でばらまかれた放射性物質の影響も、起きるかもしれないし、起きないかもしれないものであるという点で、とても似ていると常々思っていたので、そのことを話しました。

ただ、普通のがん患者にとっては個別に起きることだけれど、

原発のことは、国民に等しくふりかかっていること、という点が違う。そこを同じ土俵で考えてよいのか(普通のがんは自然で、原発は人為的、という捉え方もあるでしょうが、私は個人的には普通のがんも自然とはいえない場合も多々あると思ってます)。また、ひとりの人間が生きている、という意味では先の考え方は正解の一つだけれど、罪のない子どもたちに重荷を背負わせてしまっている、という点においてこの見方は何かの解決になるのか。そういったことをもっと考えなければだめだ、と千晶さんのメールを読んで思いました。

まだまだもやもやしたものが沢山ありますが、今日はここまでにいたします。



・・・9Pから続く

介します。

「与えられる人から与える人へ

震災から一週間たった頃、避難先で物を買占める人達の報道を見てふとNHK大河ドラマの総集編で武田鉄矢さんが作者・司馬遼太郎さんの言葉を借りて、興味深い解説をしていたの思い出しました。

『命惜しむな、名こそ惜しめよ』

もし、命というものが自分の為だけに使われるのなら、命は途切れてしまう。もし、私という命が誰かの命を励ませば、その命はつながって行く。被災地に限らず皆、必死に日々の生活を送っています。“ありがとう”からはじめよう！から始まった活動の最終目標は「想いをつなぎ・命をつなぐ」ことです！

誰かのために必死で頑張ってくれている人がいて、忘れてはいけない命がある。大切な人を失った人、生きることで精一杯の人。みんなそれぞれ、つなぐことができる想いがあり、命があります！被災者は敗者ではなく、新時代の幕開けを告げる使命を持った勇者なのです。

いつの日かやさしく“ありがとう”といえる日を夢見て共に頑張りましょう！」(つながろう南相馬！須藤栄治)

追伸:今も南相馬には様々な人たちによって援助の手が差し伸べられています。しかし、ただ1つ、大きな課題は、原発事故を引き起こした当事者である国家と東電に私たちが向き合おうとしたとき、なぜかその姿が見えてこないということ。見えない相手に向かって声を届ける術を、誰か、教えてください！

北洋舎のホームページより転載させていただきました。



## 訃報 加藤哲夫さん

2011年8月26日

仙台の豆料理クラブ会員・清水千佳さんからメールがありました。「かねてより闘病中だった加藤哲夫さんが今朝早く静かに息を引き取りました。」

加藤哲夫さん（せんだい・みやぎNPOセンター代表理事）には、商売をする上で一方ならぬお世話になりました。そしてそれ以上に、この社会で生きていく上でお世話になりました。わたしが世間に幻滅するたびに、世間に連れ戻していただきました。人々を群衆として考えてはいけぬ。一人一人と問いつくことが大切。4年前に豆ランチパーティーでは、皆さんの前でもお話しいただきました。市民の力を信じ、一人一人の力を引き出してくださいました。

14日ホスピスの加藤さんを見舞った時のことをエコロジー事業研究会のメーリングリストに書きました。下に紹介します。ご冥福を祈ります。

**京都の千晶です。**

8月14日、千佳さんが加藤さんに用事があったついでに、加藤さんのところに連れていってもらいました。

千佳さんたちが打ち合わせする2時間の間、待合室で読んでいたのは、最近出版された加藤さんの著書『市民のネットワーク』&『市民のマネジメント』（仙台文庫 [### 加藤さんとの往復書簡](http://md-</a></p>
</div>
<div data-bbox=)

## 原発は民主主義の問題である

加藤哲夫さんをお見舞いに行ったとき、豆料理クラブのメーリングリストの一部を、加藤さんがこれから出される本に使わせてほしいと言って下さいました。「原発は民主主義の問題である」というテーマの本で、それは結局かなわなかったのですが、震災以降、加藤さんの言葉に触発されて、豆料理クラブのメーリングリストでやりとりしたことは、貴重でした。

以下は、加藤哲夫さんとわたしが、エコ研（エコロジー事業研究会）のメーリングリストでやりとりした文章です。

**高島千晶 4月5日**

加藤さんの昨日のブログ(蝸牛庵日乗 <http://blog.canpan.info/katatumuri/>)、とても読みごたえがありました。書いて下さってありがとうございます。

加藤さんより以前からお噂をうかがっていた「火星の庭」(仙台のブックカフェ)の前野久美子さんが訪ねてこられました。前野さんのお子さんと、パレスチナオーリーブの皆川万葉さんのお子さんをしばらく京都の豆料理クラブ会員の家でお預かりすることになりました。

また、ドイツのオーガニックフードショップの経営者が、仲間と呼びかけてオーガニックフードを日本に救援物資として送る用意をされていて受け入れ先を相談されていたところ、以前に加藤さんからご紹介いただいていた京都の赤澤清孝さん(NPO法人ユースビジョン代表)が、せんだい・みやぎNPOセンターと連携して使ってくださいることになりそうです。助かりました。

福島県の受け入れ先も探しておられますので、ご存知の方があ

sendai.com/sendaubunko/)。読みながら、、、すごく良いことが書かれていて、かつ今の社会状況や加藤さんの状況と重なることが多いんだから、、何度も何度も涙しました。

そして病室に入ると、一転、何度も笑いました。加藤さんは朝から精力的にたくさんの人に会われ、わたしがお目にかかった4時にはおそらくたくたに疲れておられたと思うのですが、加藤さんが話しているのを聞いていると、わたしの体の中が温かくなるのです。命の炎が燃えているようでした。病気でなくても生きていない人もいます。病気で命の炎が燃えさかっている人もいます。岡本太郎のような爆発的な生命の力を感じました。

それから強烈に加藤さんが自分の主人であるということを感じました。どんな状況でも(介護を受けながらも)自分の主人であるということ。

民主主義というのは、みんなが主人ってことですよ。わたしも自分の主人であろうと思いました。

その日は、「他者によって起動された私」という話をしていました。レヴィナス。でも、それは他人の期待に左右される私っていうのとは全くちがうですね。他者によって起動される私は、加藤さんにおいては、王様のような感じでした。

加藤さんの2冊の著書は楽天堂でも販売しています。

りましたら、教えてください。

**加藤さん 4月6日**

前野久美子さんがお世話になったようですね。ありがとうございます。ドイツからの物資のお話もありがとうございます。赤澤くんとは、阪神淡路大震災後直後からのお付き合いですから、もう15年くらいになりますか。当時は大学卒業したばかりで、学生ボランティアセンターを始めたあたりでした。今では、立派なNPOの若手リーダーの一人です。

つなプロというプロジェクトと一緒にやっていますので、物資の話も進めていただけないかと思います。問題は、こういう食品を配布する限定された対象者をまとめて把握し、どう流通させるのか、という点でして、アトピー、アレルギー関連の団体は既に、そういう形で動いていますが、それだけでいいのかどうか、寄贈いただく方の意思はどこにあるのか、悩ましいところ。ひょっとすると放射能が降った福島の人たちは食べる物が無いと思っていらっしゃるのではないかと思います(海外メディアの取り上げ方もかなり過激なものが多いようですから。)

昨日のブログ「福島からイチゴが届いた。」をご覧いただきましたか？微妙な書き方をしていますが、私は、今までの反対派による(私もそうでしたからわかります)反対のための論の立て方(語法・話法)が、事故後も同じでいいのか、と疑問に思っています。いや、事故の前ですら、その語法が問われていたのではないかと(『AERA』の原発学者アンケートは

のです。彼自身が作り出してきた消費者が、彼を殺したのではないかと。こう書いて下さって、やっと、わたしの問題意識とも重なりました。

今回、放射能汚染が気になる中で、何を食べたら健康が守られるかという話題が、いろんなところで上がり、それはもちろん気になるのですが、それを中心に考えている限り、不安と憂鬱と失望から逃れられないと思いました。

加藤さん、どうぞご自愛下さい。今日に限らず、返事のお気遣いがないようお願いいたします。

それにしても福島のことを気になります。被曝の限度が20ミリシーベルトに引き上げられたことについて、文部科学省にメールしました。「福島県の子どもの安全を考える際に、成人の通常の基準である年間1ミリシーベルトを厳守するように要望いたします。年間1ミリシーベルトを越えると予想される区域のお子さんたちは、安全な場所に集団疎開させてあげてください。何とぞよろしくお願いします。」(以下略)

### 南相馬からの便り(4)

## “ありがとう”からはじめよう

北洋舎・高橋 美加子 (たかはしみかこ)

田植えが出来なかった南相馬は、6月になっても時折寒い日があり初夏の実感は無かったのですが、このごろようやく半そでを意識するようになりました。

あつというまの1ヶ月でした。夏休み中だけでも子どもたちをここから外へ出したいという想いで、受け入れ先や、地元の受け入れ窓口をつくらうと駆けずり回る日々でしたが、おかげさまで南相馬市のPTA連絡協議会の会長さんがそのお役目を引き受けてくださり、いくつかのプログラムが進行中です。たとえば、南相馬から福井へ避難したYさんのご縁で、福井のパパジャングルという団体から子ども同士の交流のお誘いをいただいたのをはじめ、長野、山形、京都などの団体からもいろいろご提案をいただいております。また、7月にスタートする世界一周のピースボートの旅に南相馬の中学生をシンガポールからエジプトまでの間に乗せていただくというビッグな企画も持ち上がり、外側の皆様の熱い想いに背中を押されて行動しております。

「危ない、危ないと騒ぐな！」というお叱りの声もありますが、日々、線量計の数字を気にしながら子どもと暮らす親の気持ちは察して余りあるものがあります。親の不安は子どもに伝播します。この地は緊急時避難準備区域という指定で、子どもたちはバスでの集団登下校、暖かい給食もままならないという不自然な学校生活が続いているのです。この閉塞感に少しでも風穴を開けたいと「夏休み子ども脱出大作戦」と銘打って始めた行動でしたが、私たちの声が、この地の子どもたちの状況に危惧の念を抱いておられた多くの外側の皆様に伝わり、つながることができ、実現に向かって着々と進行中です。今からでも協力していただける団体がありましたら、声を掛けてください。窓口は西道典さん(hachiman@bb.soma.or.jp)です。宜しくお願いいたします。

**加藤さん 4月23日**

原発事故の現地、30キロ圏内の福島県南相馬市でクリーニング店を営む友人・高橋美加子さんのメッセージ 南相馬からの便りです。読んでください。

北洋舎HP <http://www.hokuyosha.com/>

今日、ようやく電話をしました。人口が3分の1に減ってしまった南相馬市で頑張っています。声を聞くだけで、胸が詰まります。

エコロジー事業研究会の会員でした。仙台のぐりん・びいすにも、良く来てくれていました。従業員をたくさん抱えた大きなクリーニング事業の経営者としてずっとやってきた方です。

メッセージ、ぜひ読んでくださいね。

**高島千晶 4月23日**

たった今、加藤さんのブログで読みました。豆料理クラブの仲間ともシェアしました。加藤さん、ありがとうございます。

振り返ってみると、この地は、声を挙げることを嫌う土地柄だったような気がします。それは、狭い地域でもそれなりに機能しており、際立った不都合が見えてこなかった地域だったからかもしれません。待っていればいずれは、満足するものではなくても「ほぼ、ほぼ」に希望が叶えられる、そんな状態が長年続いてきたような気がします。スポーツも学力も就職も、「ほぼ、ほぼ」にがんばれば、子どもたちはこの地で暮らすかぎり安泰に生きていられる、親も周りもそう思っていたのではないのでしょうか。だから、ことさらに問題を指摘して声を挙げる人を疎んじる傾向が続いていたような気がします。「みんながいいということには間違いがない」そういう下地が、原発を増設し、プルサーマルさえも容認してしまっただけではないのでしょうか(この傾向はここだけでなく、日本全土に蔓延していたような気がします)。

しかし、3・11以降全ての基準がひっくり返り、一人ひとりが自己判断で行動を迫られる事態になりました。そこで浮かび上がったのは人と人とのつながり「絆」でした。家族や親戚といった血縁の繋がりがだけでなく、友人、知人、地縁といった広い範囲のつながりが「絆」という形になって多くの人の心に生きる勇気を与えてくれました。また自力の限界を支えてくれたのが、全国からの行政支援、自衛隊、ボランティアの皆さんでした。そこで、互いが助け合い、支えあったときに生まれ出た言葉が“ありがとう”でした。

私たちは声を挙げることの本当の力を実感したのです。

今、南相馬では、たくさんの“ありがとう”の奇跡が生まれています。放射能に汚染された地域として全世界にその名を知られてしまった南相馬市は、それを跳ね返し、厳しい現実を生き延びる力を“ありがとう”の気持ちと言葉から頂き、未来に向かって行動を始めています。ここにひとりの若者からのメッセージを紹介

3Pへ続く

とても良い文章でした。その一部です。私も信頼している文学者の一人です。

「正直に言えば、ぼくは今の事態に対して言うべき言葉を持たない。

被災地の惨状について、避難所で暮らす人たちの苦労について、暴れる原子力発電所を鎮めようと(文字どおり)懸命に働いている人々の努力について、いったい何が言えるだろう。

自分の中にいろいろな言葉が去来するけれど、その大半は敢えて発語するには及ばないものだ。それは最初の段階でわかった。ぼくは「なじらない」と「あおらない」を当面の方針とした。

政府や東電に対してみんな言いたいことはたくさんあるだろう。しかし、現場にいるのは彼らであるし、不器用で混乱しているように見えても今は彼らに任せておくしかない。事前に彼らを選んでおいたのはわれわれだから。」

駿河湾の桜えび、懐かしいです。富士市の仕事で行ったときに、いっぱいいただきました。鶴見俊輔さんのことも、よくわかります。枕元に、「かくれ佛教」という本があります。

関係性の中から、私たちは世界を認識し、世界と相対するのだと思います。内田樹は、レヴィナスを引いて、正義の裁きと慈愛の過剰の終わりなき循環を主張しています。「ためらいの倫理学」(角川文庫)。

「しかし、「裁き」だけでは、正義だけでは、他者との出会いは立ちゆかない。そもそも正義が希求されたのは、他者の苦しみによって震撼されたからではないか。傷つけられた人間性への気遣いが正義を求めたからではないのか。



まず起源に「慈愛の過剰」がある。それが厳正な裁きと正義の執行を要求する。しかし、被告もまた「かけがえのない有責者」として、誰によっても代替し得ない固有の「顔」を持っている。その「顔」を見てしまうと、裁きは下せなくなる。それゆえ「裁き人」は、あえて顔を見ないのである。しかし、ひとたび裁きが下されたときに、人は再び「慈愛の過剰」に帰還する。私たちはうなだれる被告の「顔」を見つめ、「なんとかして裁きの厳正さを修正しよう」と心を砕くことになる。断罪された人々のために「正義の峻厳をやわらげ、個人的な訴えに耳を傾けること」、それが私たち一人ひとりの次の仕事となるのである。

レヴィナスが説いているのは、この慈愛と正義の終わらない循環である。「裁き」と「赦し」のめぐる美しい交替である。それがレヴィナスのいう他者経験なのである。」

「なじらない」「あおらない」という池澤さんの態度に関わる決意。鶴見さんの態度の哲学に似ていますね。

桜えびセット、お送りください。別途、住所を連絡します。

**高島千晶** 4月20日

加藤さんが書いてくださったことをずっと考えています。「DAYS JAPAN」5月号に、広河隆一さんの書いた文章が載っていて、胸に迫ってくるものがありました。その一節です。

「3月24日に福島県郡山市の隣の須賀川市で64歳の有機栽培経営者が自殺した。安全な野菜づくりを誇りに生きてきた人だったという。彼は言われているような風評被害の被害者ではない。彼は自分の生涯かけてやってきたことを放射能が打ち砕いたことを知り、自殺したのだ。彼は原発事故の犠牲者である。」

別の話ですが、東京の豆腐屋さんが、豆腐は大豆と水でできているから、水を探して今の場所に豆腐屋を建てたのに、東京の水が放射能で汚染されたとき、落胆したことを知人から聞きました。保健所はその水で豆腐を作っているというけれども、赤ちゃんが飲んじゃいけない水で豆腐を作っているのかと悩んだそうです。

買い手があるかないかということ以上に、自分の作ってきた物が台無しにされたことに失意があったのではないか。

わたしは、福島県のを今少しでも仕入れたいと考えて、今、あれこれ注文しています。でも、そのこととは別に、加藤さんが書かれた次の文章は、どうもじっくりしないかんじがするんです。

「先日、福島県須賀川市で、有機農業を30年間続けてきた男性が、政府が出荷制限を発表した翌日の朝に自殺しました。彼の絶望に、私たちは加担していないでしょうか。彼が求め続けたものが彼を裏切ることが見えたからこそ、彼は死んだのではないのでしょうか。台風で作物が全滅しても、農業者は簡単に自殺したりはしません。彼の野菜や果物を買ってくれていた消費者こそが、政府の言うことを信じず、微量の放射能はとても危ないと判断し、真っ先に危ない地域の野菜や果物を買わなくなる人たちだということです。」

そして、「脅かす」と「あおる」ということについても、まだよくわかりません。ただ可能性を指摘しても、人によっては脅かされたと感じてしまうことをずっと考えています。端的に「気休めがほしい」という声も聞きました。ずっとそのことを考えています。また考えます。

**加藤さん** 4月21日

ご無沙汰しています。抗がん剤治療と体調の関係で、すいすいと返事ができません。ご容赦ください。

須賀川の有機農業者の件、広河隆一さんの書いていることは、基本的にその通りと思います。私が書いたことは、何の証拠もない推測です。ただし、私は、彼の死について、責任のある者は原発を推進してきた者たちである、とだけ言えないものを感じておりまして、自身の責任をどう見つめていくかというときに、ずっとやってきたお店で、絶対に無農薬でないと思わない、検査で検出限界値以下でも、低農薬は嫌だという消費者と、過酷な労働の現状から言って、そういうことを彼らに要求できるのだろうか、という疑問との葛藤から、自然食品や無農薬を売りにしないお店というコンセプトで、ずっとやってきたことと重なって、ああいう言い方になっているのです。彼自身が作り出してきた消費者が、彼を殺したのではないかと。

今日のブログに、東北の山や海に生きる人々のことを書きました。ご覧ください。

**高島千晶** 4月21日

入院中の加藤さんに、こちらこそたいへん失礼しています。また、わたしの方こそ、すいすい考えられないのです。

加藤さん、でも、わたしはようやく腑に落ちました。

「自然食品や無農薬を売りにしないお店というコンセプトで、ずっとやってきたことと重なって、ああいう言い方になっている

ほんとうにがっかりしました。賛成派も反対派も1ミリも主張を変えていないのです)。

ひどく大雑把に言ってしまうと、私たちの主張は、政府や電力会社の言っていることを信じてはいけない・放射能は微量でもとても危険なものである・事故が起きたら、とにかく逃げなさい。というものでした。その通りと言えばその通りなのですが、これはある種の脅しのレトリックでもあります。

23年前には、「原発赤信号」という月刊誌を発行し、「女川原発、事故が起きたらこうしなさい」「あなたは死の灰を食べている」などの連載をしていました。今、読み返しても良く書けていると思います。「良く」とは、科学的でもあり、かつ女川原発から50km圏内の仙台市の住民が十分に恐怖を感じ、原発建設に異議申し立てをしようかと思うほどには、という意味です。

私自身は「原発赤信号」でキャンペーンをしたときは、「女川原発 事故が起きたらこうしなさい」という連載の最後に、実はとても逃げられないのだから、その前に止めましょうというためのレトリックなんです、とバラしていました。

しかし、事故は起きてしまいました。福島県のみならず、広範囲に放射能は降り注ぎました。そのとき、逃げ出せる人と逃げ出せない人、あえて残る人たち、さまざまな対応が見えています。事故前とは違った世界に私たちは住んでいると思うのです。

そして、たくさんの農作物が捨てられ、注文がキャンセルされています。福島県の隣の県やその隣の県であっても、実は、程度の差はあれ、放射能は降っています。そのとき、程度の差を無視して、微量でも放射能は危ない、と言うことは、

どういうことをもたらすのでしょうか。そして、レトリックとしても、市民を脅すことによって恐怖を感じさせ、原発を止めようという方法論は、事故の前には失敗をしてきたわけですが、事故の後だからこそ効果的なのでしょうか。

福島第一原発から50km圏内の福島市には母親が一人で住んでいます。最初の水素爆発があった時に南東の風が吹いていたため、原発から北東部にあたる南相馬市、飯館町、川俣町、福島市は、ヨウ素131がたくさん降り、大気中の放射線量が高くなりました。福島市は一時間あたり、20マイクロシーベルトです。一年間に換算すると、約180ミリシーベルト。原発作業員の許容量(がまん量)は、年間100ミリシーベルトですから(緊急時では500ミリシーベルト)、さあどうしましょうか？

先日、福島県須賀川市で、有機農業を30年間続けてきた男性が、政府が出荷制限を発表した翌日の朝に自殺しました。彼の絶望に、私たちは加担していないでしょうか。彼が求め続けたものが彼を裏切ることが見えたからこそ、彼は死んだのではないのでしょうか。台風で作物が全滅しても、農業者は簡単に自殺したりはしません。彼の野菜や果物を買ってくれていた消費者こそが、政府の言うことを信じず、微量の放射能はとても危ないと判断し、真っ先に危ない地域の野菜や果物を買わなくなる人たちだということです。

今の私は、こういうことについて、たくさん書きたいことがあるのです。しかし、なかなか時間がありません。体力もありません。少しずつ、書いていきたいと思います。

**高島千晶** 4月6日

加藤さん、入院中である上にお忙しいところ、書いて下さってありがとうございます。わたしもこの1ヶ月、ずっと考え続けています。最初は、加藤さんが指摘して下さったことに、ほとんど考えが及びませんでした。

けれど、福島県には豆料理クラブ会員が一人いますので、その方と話す中で、また、仙台の千佳さんとやりとりする中で、少しずつ理解が広がりました。

福島の会員は、南の矢祭町に住んでいて、7歳のお子さんがいらっしゃいます。地震直後から受け入れ態勢があることをお伝えし、交通が動き出した日には、お子さんを迎えに行くこともお伝えしたのですが、お子さんと子ども留まることを選ばれました。昨日は、身近な友人家族が、福島を去ることを決められたので、とてもショックを受けておられます。

事実を知りたいと切に願っておられます。基本的には、政府の説明を受け入れておられたので、反対派の情報には、かなりいらだっておられました。けれどここに来て、政府の説明にも、疑問を持っておられます。

その方の、留まる選択には、共同体への責任を感じます。

一方、豆料理クラブで避難してくる人の受け入れ態勢を整えているとき、そのことで放射性物質が受け入れ家庭に入ってしまう



ことを心配してメールしてこられた会員の方もありました。その方も悩んでおられたから腹をたてることではないのだけれど、その時は頭に血が上りました。仮にリスクがあるとしてもそれは受け入れられるべきリスク、と思いました。食べ物のこともそうですね。自分はもうすぐ50歳なので、放射能の影響を受けにくい。自分の心配より、どうやって被災地を支えるか考えます。

でも10歳の息子の食べ物や日常には、かなり慎重になります。何にせよ、今までになく住む場所や立場によってまとまり難いものを感じた1ヶ月でした。でも、なんとか一緒に考え続けることができている。仙台・福島を含め広い地域に色んな会員がいたおかげです。自民党の原発容認派の人もいるのです。豆を食べる会ですから。それは強みだと思いました(自民党員の人の発言にも頭に血が上がるがありますが)。途中しんどくなって抜ける人もいれば、加わってくれる人もいました。加わってくれる人が多かったです。

せんだい・みやぎNPOセンターの存在に、今回、赤澤さんを通じて助けられ、いざというときは今までであるつながりが生きるなあと感じました。実際の支援活動でもそうだし、考えを深める上でもです。

加藤さん、書いて下さったこと、豆料理クラブの人たちにも読んでほしいのですが、転送させてもらっていいでしょうか。一緒に考えたいのです。

**加藤さん** 4月6日

一緒に考えることがもっとも重要と思います。千晶さんが書かれていることと共にご紹介ください。

**高島千晶 4月7日**

加藤さん、ありがとうございます。加藤さんからのメールと、わたしの返信、豆料理クラブの会員にタイミングを見て紹介します。

すぐに転送しようかと思ったけれど、店に来られるお客さんが、それぞれいっぱいいっぱいになっていて、まず元気づけるような言葉をかけないことには（そういう場を持たないことには）、続きが厳しそうです。

わたしがやっと、シーベルト毎時×時間＝シーベルトだと理解して、それを皆さんに伝えようとしても、まずわたしの説明も悪いし、皆さんも連日の報道を見ることにくたびれきっていて、中にはもう理系のことは無理って思っちゃう方もあります。そうした方の、取り残された感、ストレスも大きいみたいです。

時速×時間＝距離、このことを学校で理解するときは、50分の授業が必要だった。そうやってゆっくり自分の常識に登録してきたと思うんです。でも、今、突然毎日のように、常識に加えなければならぬ知識をつきつけられて、それを消化できないでいる。加えて、被災者に何かしたくても何もできていないと思っている。子どもの世話もしなくちゃいけない。明日は入学式。そのようなことを話される時、無理はないと思います。

最初は被災者を支援することが大事と、思っていたけれど、今はみんな考えていくために、みんなを励ますことも大事と、数日足踏みしています。

**加藤さん 4月7日**

ほんとうに今は、少しずつ、言葉を大事にしながらかえていくことが必要だと思えます。



脅しと恐怖では、人は正しい行動が取れなくなります。一時的に原発に反対する人が増えたように見えますが、「脅し＋恐怖＝絶望」なので、そのあとの解決に結びつきません。これは20数年前に反原発運動が盛り上がったとき、私たちが危惧していたことです。

ぜひ、心に響く言葉のやりとりを続けてください。それをこのMLにも流してくださいね。

私は今、そういう言葉の発信と、中長期的な戦略に基づいた新しい脱原発運動の可能性について準備を進めています。私自身が先頭になってことをおこすことはもうできませんが、新しい人たちがその担い手となる時代が来ています。そして、短期的な市民の盛り上がりだけではなく、政策の提案とロビー活動まで視野に入れた全国的な運動にならなければなりません。

古い運動家や科学者の言葉では、もう通じません。皆さんが生活の中から創り出す言葉、しかし、非科学的ではない、しっかりした根拠ある言葉と、この間の市民社会の成長による政策提案力の効果的な発揮という見通しがあれば、流れを変えていくことは可能でしょう。

私はその成果が見えるところまで、生きていられるかどうかわかりませんが、かつて関わった運動の失敗を踏まえた出発の裏方程度のことはできるのではないかと、と思っています。

**高島千晶 4月7日**

加藤さん、ありがとうございます。「中長期的な戦略に基づいた新しい脱原発運動の可能性について準備」、そうなのですね。ほんとうに必要なこと。全然頼りないわたしですが加わりたいです。

数日前に、ツイッターに書きました。「日本中で、孤児のような気持ちになっている人が、たくさんいるのではないかと。お父さんが守ってくれる、国が守ってくれる、その漠然とした安心はくずれた。お父さんは守れなかった。国も守ってはくれない。安全は与えられるものではなく、自分たちで勝ち取るもの。そのことに私たちは気がついた。」

今、孤児のような気持ちの人がたくさんいるように感じます。だからお互い支えないと。力づけあっていかないと。

民主主義においては主人というのが国民なのだから、わたしたち一人一人が自分を主人と思えるくらいに、自尊感情を持てるようになることが大事。そのために、エンパワメントというんでしょうか、共感して力づけるつながりを持たないと、、今、そう思っています。まだるっこしいようでも、商売を始めようという主婦や、コミュニティカフェを始めようとする若い人を応援することが、今までにも増して大切に感じられます。

わたしは最初、「脅し＋恐怖＝絶望」ということがわかりませんでした。少しずつ、恐怖の中で人は思考停止するのだと感じるようになりました。最初は、思考停止したり安易な楽観論に陥る人に失望しました。今も時々、失望します。けれど当惑しつつも、だんだん無理はないと思うようになりました。

難しいですよ。単純に事実を伝えようとしても、政府が安全だよというキャンペーンをはっている中では、事実も脅かしに聞こえてしまう。

この1ヶ月足らず、豆料理クラブのメーリングリストでは、今までになかったた

さんの情報と意見が流れました。その中で、福島に住む会員からのメールにはほんとうに胸が痛くなりました。

(以下略)

**高島千晶 4月8日**

昨日、加藤さんのメールとわたしのメールの一部を豆料理クラブのメーリングリストに流したところ、静岡県に住む豆料理クラブ会員の藤田理恵さん(浜岡原発を止めよう運動をしてきた人です)が加藤さんのメールにとても感じるところがあったようで、メールをくれました。転送します。

「静岡県掛川市の藤田です。

千晶さん、加藤さんのメールを紹介して下さってありがとうございました。これこそ、私がこの1週間近く抱えていたもやもやした思いに通じるもので、急いでキーを叩いています。

3月11日以来、何とかして浜岡原発を止めたい人たちが、毎日のように電話やメールが来ます。ある人はまったく初対面、ある人はしばらく休眠(?)していた方。テレビの報道への質問もあれば、投書の添削してほしいとか、イベントの応援をしてあげてとか、勉強会の講師派遣要請、集会で発言求むとか、リストに出てほしいとか、取材の依頼まで、まったく嵐に巻き込まれたような毎日です(先週は、あのアルジャジーラから取材の電話があってびっくりしました。時間がとれず原発近くの人にお問い合わせが)。

そんな中、今回の原発震災を契機に動き出した若い人から、「周りがやかましくなって外国のマスコミもどんどん入ってくるので、御前崎市(原発立地市)の人たちがナーバスになってる、

あるいはピリピリしてる」という声を聞きました。また、地元地区への中電の説明会でも、あまり発言がなかったそうです(おとしの地震で長く止まっていた5号機の説明会では、中電に厳しい意見が相次いだにもかかわらず、です)。

私の地区(掛川市南部)は15キロ圏内ですが、ここでも中電の関連会社で働く人が少なからずいます。こういう原発関連で働いてきた人たちにとって、「東海地震で浜岡原発が福島みたいにならないかととても怖い」「だけど実際に原発が止まったら自分たちの仕事はどうなるのか」このどちらもが本音ではないでしょうか。本当に事故がおきるかもしれない不安と、仕事を失うかもしれない不安と。

また、新しく動き始めた、特に若い人たちは、浜岡原発は止めてほしいけど、「反原発派」と見られることをとても警戒しています(だから、マスコミにも「反原発運動をする気はない」と言っています)。

しかし、これまで長年静岡県で原発反対運動をしてきた人たちが、どれだけこうした声を理解しているか、いや、聞こうとしているか、私には大いに疑問です。それは例えば、3月11日以降出されたチラシなどを見ても、加藤さんの書かれた「今までの反対派による反対のための論のたて方(語法、話法)」を一歩も出ていないと私も思うからです。「推進派」「反対派」に分けたがる人たち(マスコミを含めた)に、これでは勝てるはずがありません。

ただ、誤解のないように付け加えますが、小出さんのように警鐘を鳴らし続けた学者や(特に福島県で)反原発運動をしてきた人たちで、「それ見たことが、あれほど言ったのに」と思っている人は誰もいません。皆、自分たちの力不足に痛恨の思いをもたれています。

ここで私は先の大戦の戦争責任を考えるのですが、あの戦争は国民(ふつうの庶民と言い換えてもよい)に責任はないと思います。では被害者かというともそれも違う。戦争を起こした責任はないけど、戦争を食い止められなかった責任があると思うのです。なぜ食い止められなかったのか。そのところを考えていかないと、また同じことが起きてしまうかもしれない。

原発に置き換えたら、反対していた人たちはなぜ止められなかったのか、自分たちのやり方に問題はなかったのか、それが必要ではないでしょうか。

地元で揺れる人たちの悩みを、共に考えていきたいです。もう12時を過ぎたので、いったんここでパソコンを閉じます。加藤さんのメール後半の生産者と消費者のことについてはまたあとで。このテーマをシェアできて、加藤さんとこのMLに感謝しています。」

**高島千晶 4月9日**

仙台、また地震があつたいへんですね。気の休まらない状態が1ヶ月も続くということ、ほんとうにしんどいこと。

加藤さんや長く運動に関わってきた人のように繊細にわたしは考えられてないと思うのですが、今考えていることを書きます。わたしは、ちょっと前に高橋源一郎がツイッターで、マイケル・サンデルと鶴見俊輔を対比させて書いていたことを思い出しています。

サンデル教授は、正義を「論理」の世界で考えるけれど、鶴見俊輔は、ある関係性の中で何が言えるのかということを考えている。たとえば、「なぜ人を殺してはいけないのか」「自殺したらいけないのか」という問いに、人はしばしば沈黙してしまうけれど、それはその問いが誰から発せられた問いかが分からないからだ。質問者と自分との間に関係がないと、答はないってことになるし、正義を考える上でも、論理に頼るしかなくなってしまふ。その質問をした人と自分とに関係があれば、そこで自ずと出てくる言葉があるだろう。そんな論考でした。

わたしは、原発の問題も同じだなあと思う。「知ることからはじめよう」って本があつて、それはそれでいいスタートと思うのだけれど、わたしは「関係を作ることからはじめよう」ということを提案したい。商売人だから、お金を使うことを通して。

たとえば、上関(山口県上関町。原発新規計画あり。対岸の祝島の人が30年にわたって反対運動を展開)のことを考えるとき、「電力会社と自分」という関係しかなかったら、電気を使わせてもらってるなあ、という義理を強く感じると思う。でも、祝島のひじきを食べていたら、また別の感じ方も持てる。入会した人が豆料理クラブのメーリングリストを読んで下さるとき、上関が話題になると、祝島ひじきを食べたことがあつて、あれはおいしかったなあ、祝島つてところの人は今、こんな問題を抱えているのかつて風に思う。

浜岡原発のことも、わたしはまず駿河湾の桜えびをたくさんの人に食べてもらいたい。

そして、その後で(あるいはそれと同時に)、そこに住む人にとって、また漁業者にとって、浜岡原発を止めることが悲願であることを伝えたい。それで、今度「大豆と桜えびのかきあげ」という豆料理キットを作ろうと思います。「守ろう、海の幸。止めよう、浜岡」キャンペーン。

新物の桜えびが、今日入荷しました。桜えびの生産者が書いてくれました。

「キャンペーン企画、地元静岡人としても切なる願いです。静岡の海は駿河湾、遠州灘、伊豆近海と魚が豊富です。私も地場産業で美味しい桜えび・しらすを多くの方々に食べて頂けるように日々勉強です。今年は駿河湾の水温はまだ例年より低いですが、漁獲状況は悪くないのでこれから期待できそうです。」

走り書きだけれど、今、わたしが力を入れてることを書きました。三陸のわかめも仕入れて、お豆と合わせてキットにしたいです。被災した仙台の味噌屋さんから、味噌を仕入れました。

加藤さんが問題提起して下さった他のこと(もっと難しくしてすぐには答が出ない問題)も、考えます。宿題です。加藤さんが読まれた『AERA』もとりよせました。

**加藤さん 4月9日**

こんばんは。余震でまた被害が出たところも多いようです。自宅もすこし柱と壁の間に隙間が広がったという話です。

私の治療は抗がん剤第一クールを終了点滴を終わり、三日後の今日の血液検査では、白血球数が回復していますから、第二クールの治療も可能との話です。まだ自宅に帰っても、ガスが復旧していないので、しばらくは病院です。

今日の朝日新聞の池澤夏樹さんのコラム「終わり始まり」は、